

水がぶどう酒に 変えられる以上の人生

ヨハネ2章1～12節
2021年1月10日
松田 基子 師

神様は、人類を罪による永遠の滅びから救うために、御子を人の世に送られましたが、神の御子のイエス様は、人の生くる悩み、苦しみ、罪との戦いを、その身に負うために、名も無く貧しいマリアとヨセフの家庭で育たれました。その土地で、イエス様が神の御子であられることを知っていたのは、御子を宿したマリアと、夢でお告げを受けたヨセフだけでした。

イエス様は当時のどの家庭とも同じ様に、両親の手伝い、弟妹の面倒を見て、イスラエル信仰共同体の一員として、律法を重んじ、神様第一の生活を送って成長されました。父ヨセフは聖書にその死が記されていませんが、若くして亡くなり、イエス様はヨセフ亡き後、長子の責任で弟妹の面倒を見られたとされています。

年令およそ30歳になられ、父なる神様の命を受けて、家を出て神の国の福音宣教に、公に立たれました。その時点からイエス様の公生涯と呼びます。イエス様は御自身が人類の罪を負われることを自覚なさっていて、公生涯に入るに当たって、先ずなさったことは、ヨルダン川で罪人の列に並んで洗礼者ヨハネから洗礼を受けられたことでした。

洗礼者ヨハネは、その時の事を、
ヨハネ福音書1章32節で、

「わたしは“霊”が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た。わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を授けるためにわたしをお遣わしになった方が、
『霊が降って、あるひとにとどまるのを見た
ら、その人が、聖霊によって洗礼を授ける
人である』

とわたしに言われた。わたしはそれを見た。
だから、この方こそ神の子であると証したの
である。」

と証言しました。

そして洗礼者ヨハネは、イエス様を、

「世の罪を取り除く神の小羊だ。」

と自分の弟子たちに、そして周りの人々に証言しました。その事を通してアンデレ、ペトロ、ヨハネ、ヤコブがイエス様に付いて行って弟子になりました。続いてフィリポとナタナエルが弟子に加えられました。

イエス様は、真の神の国を宣べ伝えるために、6人の弟子たちと共に活動を始められました。ヨハネ福音書はその事を記しています。

2章1節を見ますと、

「3日目に、ガリラヤのカナで婚礼があつて、
イエスの母がそこにいた。イエスも、その弟
子たちも、婚礼に招かれた。」

とあります。

そこで何が起こったのでしょうか。当時、人々の日常は労働に追われ、特別の楽しみも無く、食卓は貧しく、そのような生活の中で、婚礼に招かれることは休息し、歌ったり、踊ったり、そして、美味しい葡萄酒と御馳走を頂ける時として、自ずと心浮き立つ時でした。誰も婚礼に招かれることは喜びでした。それは一般的には、親戚友人のみならず、村じゅうの人々が招かれたようです。それも、1日では終わらず、数日から長いものは1週間も続いたそうです。

当時の結婚年齢は男性が20歳くらいまで、女性は15、6歳までだと言われていますが、その費用は花婿1人では負いきれず、1家で背負い、時には借金をしなければならない人生の大仕事でした。

さて、この婚礼には母マリアとイエス様だけが呼ばれたと言うのではなく、6人の弟子たちまで

呼ばれていますし、母マリアが裏方を取り仕切って居ることから、イエス様とも近い関係にあった家族の結婚式だったと思われます。

婚礼は挙式当日の夕刻、盛装した花婿が友人に取り巻かれながら、花嫁の家に行き、花嫁も華麗な装身具で身を飾って盛装し、彼女の友人たちに取り巻かれ、花婿の実家に向かいます。行列は花婿とその友人を先頭に、灯火を灯して道を照らします。花婿の実家では、この行列の到着を待ち受けています。その到着は時にマタイ25章の、あの10人の乙女の例えにありません様に、夜中になることもありました。

そして、祝宴が始まります。祝宴の7日間は、ユダヤ教の規則である経札を付ける義務と、週2回の断食から解放されました。それは働きずくめの村人たちにとっては、心身共に解放され、活力を得るときでした。それだけに、それを主催する方は大変です。料理もさることながら、祝いの席に、葡萄酒は欠かせません。婚宴で皆が一番気を付けることは、葡萄酒の確保でした。

イエス様と、弟子たちが招待された結婚式でも、ぶどう酒の準備に一番気を使い、確保されていた筈です。ところが、婚礼の祝いもあと僅かと言うところに来て、一番困ったことが起こりました。マリアは裏方を取り仕切る身で、どんどんぶどう酒が減っていく様子に、

『この分で行くと、ぶどう酒が底をつくのは時間の問題で、必ずぶどう酒は足りなくなり、花婿は非難され、せっかくの婚礼が台なしになる。』

『どうしたら良いだろうか。』

と思案しました。そこでマリアは、

『イエス様なら、神の子の力で、この家族を助けるために、ぶどう酒を作り出す事が出来る』

と確信しました。

そこで3節に、
「ぶどう酒が足りなくなったので、母がイエスに、

『ぶどう酒が無くなりました。』

と言った。」

とあります。マリアは花婿の窮状を何とか助けたくて、イエス様に対して親子の情と、イエス様の神の子の力への期待で、

『あなたなら助けることが出来る。

助けてあげて。ぶどう酒を作り出してあげて。』

との思がそこには込められていました。

ところが、4節を見ますと、

「イエスは母に言われた。

『婦人よ、わたしとどんなかかわりがある

のです。私の時はまだ来ていません。』

との答えが返って来ました。この答えに、わたしたちは、とてもイエス様らしくない冷たさを感じるのですが、それは、その時代のその国の感覚を理解していないからです。ここでの、

「婦人よ」

と言う呼びかけは、当時のイスラエルにおいて、女性に対する丁寧な尊敬を込めた呼び方でありました。

イエス様の答えには、

『ぶどう酒が無くなったということが、わたしと、つまり、神様が私にお与え下さった使命、即ち、メシアとしての働きに、どんな関係があるのですか。』

『天の父が、ご命令になるメシアの使命を果たすべき時はまだ来て居ません。

私は天の父が、ご命令になることだけをしなければなりません。』

と言う意味が込められています。

イエス様は、神様の命により、公生涯に立たれた時、既にマリアとの人間的母子関係を脱しておられました。

「婦人よ」

と呼ばれたのは、その現れでもありました。イエス様は、公生涯に立たれて、はっきりと自覚な事な事は、御自身が真の救い主メシアとして、人類を愛し、人類の罪を引き受け、人類の罪を御自身の身で贖うことでした。全てはそこに向かって進んで行くことを堅く決意されていました。マリアには、メシアの使命が人類の罪の贖いにある事など、考えも及ばないことでした。ただ、マリアには、

『イエス様が、神の子の力を以て
何事でもする事が出来る。』
と言う確信がありました。

マリアは信仰に生きていました。イエス様から期待した答えは返って来ませんでしたが、イエス様が他者の窮状を見ごしにされることはない。最善の道を開かれると言う、その確信がありました。そこで、召使いたちに対して、

「この人が何か言いつけたら、
そのとおりにしてください。」
と頼みました。

イエス様には既にお考えがありました。ユダヤ人の家にはどの家にも、清めの儀式に用いる石の水瓶が置いてありました。ユダヤ人は宗教的理由から、食事をする前には、外で被(こうむ)った様々な宗教的な汚れを、内に取り込まないために、儀式に沿った手の洗い方で、手を洗わなければなりません。そのために用意された石の水瓶、それは80ℓから120ℓ入りのものが6つ置いてありました。

そこでイエス様は召使いたち、
「水がめに水をいっぱい入れなさい。」
とお命じになりました。召使いたちにとってみれば、清めの儀式を行うためには、十分な水がそこには入っていました。もうこれ以上水を汲みに行く必要は無い筈でした。それに、井戸は村に幾つもある訳ではありません。水汲みの仕事は召使いたちにとっては重労働です。1回でも少なくしたいところです。

しかし、この家の召使いたちは、とても主人思でした。主人を助けるためなら、イエス様の言われることを何でもしようとの、覚悟があり、それで控えていました。ですから、召使いたちは、自分の考えを捨てて、唯イエス様のことば、命令に従いました。

「瓶の縁(ふち)まで水を満たした。」
と言うのですから、彼らがどんなに労を惜しまずイエス様の言葉に従ったかが分かります。

するとイエス様は、8節に、
「さあ、それをくんで宴会の世話役のところへ持って行きなさい。」
と言われました。召使いたちは、自分達が汲んで来た水が、既にぶどう酒に変わって居ることに気付きました。ぶどう酒の芳醇な香りは、召使いたちの顔をほころばせ、笑顔一杯になりました。器に汲むと、世話役がどんな顔をするのか。想像しながら持って行きました。

すると世話役は、ぶどう酒に変わった水の味見をしました。その素晴らしさに、それがどこから来たのか、世話役は知らなかったのも、花婿を呼んで、10節に、

「だれでも、初めに良いぶどう酒を出し、
酔いがまわった頃に劣ったものを出す
ものですが、あなたは良いぶどう酒を
今まで取って置かれました。」
と誉めています。

花婿は裏方で何が起こったのかを知りません。水を汲んだ召使いたちだけは知っていました。花婿は後で、事の次第を聞いてイエス様にどんなに感謝することでしょうか。

ところで、ヨハネ福音書を書いた、著者ヨハネは、ここにただ、イエス様が最初の奇跡を起こされたことに感動して、この事を福音書に記したわけではありません。11節に、

「イエスはこの最初のしるしをガリラヤのカナで行(おこな)って、その栄光を現された。」

それで、弟子たちはイエスを信じた。」

と記しています。ヨハネは、イエス様の奇跡に驚いているのではありません。イエス様が奇跡を起こされたのには、深い意味があり、それはしるし、つまり隠された意味の現れなのです。水がぶどう酒に変わった。それはイエス様がお与えになるものを意味していました。

イエス様が公生涯に立たれ、これからお与えになるものは、それまでの律法を、何とか一生懸命に守って、神様に受け入れて頂こう、人間の努力で、神様に認めて頂こうとする事ではありません。

ところが、当時の社会は、人間の努力では神様の前に正しいとはされないものを、

『あたかも自分はもう

正しい生き方をしている』

と思いついでいる人達が多く、その人達が、そうできない人達を排除する社会となっていたのです。イエス様はそのような社会に対して、ルカ福音5章31節、32節で、

「**医者を必要とするのは、健康な人ではなく、病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである。**」

と言われました。

人は皆誰も、神様の前には永遠の滅びに引き渡されるべき罪人です。イエス様はそんな罪人の罪を負い、その身を十字架に捧げて、血を流し、贖って救うために、罪人を招いて下さるのです。それは、

『水がぶどう酒に変わった以上に、

全く質を異にする世界を、イエス様が

与えて下さる。』

と言うことの徴(しるし)でした。

初代教会は、イエス様の命令によって聖餐式を行いました。そして、ぶどう酒をもって、イエス様の十字架の血の贖いを覚えました。

ところで、宴会の世話役は、ぶどう酒に代わった水の味見をし、良い葡萄酒だと褒めています。そのぶどう酒がどこから来たのかわかりませんでした。このように世間はイエス様がどこから来られたのかわかりません。しかし、イエス様の言葉に従った召使い達は知っていたように、イエス様を信じ従った時に、イエス様は天から来られた、真の神の子メシア救い主であることを知り、また、**実感出来るのです。**

イエス様はこの様な深い意味を込めて、その徴(しるし)として、水をぶどう酒に変える奇跡を起こし、神の子の栄光を現されたのでした。弟子たちにはまだ、その深い意味は解りませんでした。このお方を信頼し、信じ従ったのでした。

今も、イエス様を**信じ従う人生**は、それまでの人生とは全く質を異にした、**永遠の救いへの道**を歩ませて下さる人生へと**変えられます**。私たちも、イエス様を心から信じて、私たちの人生を通して、**水がぶどう酒に変えられた人生を証し**して行こうではありませんか。

お祈りを致します。

天の父なる神様 イエス様はカナの婚礼に於いて、水をぶどう酒に変えて、御自身が私たち罪人のために、十字架で血を流し、罪を贖って下さる事をお示し下さいました。

その深いご愛をしっかりと受け止め、主がお命じになることに聞き従って行く者とならせて下さい。

尊い救い主イエス・キリストの

お名前によってお祈りを致します。

アーメン。